

現在、多くの高校で、職業や学部・学科、大学研究が行われている。だが、「調べるよつに」というだけでは、どうやって調べればいいのかわからない生徒もいる。よつて、なにをよつてどう調べるのか、提示する必要がある。

茨城県立土浦第二高校では、1年次を自己理解、2年次を自己発見、3年次を自己実現の時期と位置づけ、LHRなどを使って適性検査や職業研究、大学研究などを行っている。これらの取り組みを通して、生徒は進路に対して、具体的にどんなことについて考え、どのように調べればいいのかを学ぶ。そして、進路についてなにか知りたいことが出てきたとき、情報を得る一つの手段として、同校では、パソコンを使った「FINE system」の利用を生徒に勧めている。

「FINE system」とは、大学で学べる学問、学部・学科、職業、模試の成績などについての情報をインターネットの環境を利用して取り出せるシステムのことである。生徒が具体的に将来をイメージできるような情報、例えば、各大学の学生の体験談、それぞれの仕事に就いている人の話などが、取り出せるようになってい

る。分野別成績などのデータも整理されているため、面談の際に活用することもできる。

### 進路指導室の来訪者が激増

生徒は実際に、パソコンを使って、進路につ

生徒が進路を考えるとき、簡単に知りたい情報を入手できるパソコンが、便利な道具となつていようだ。

## パソコンを使って、進路情報を収集し、より深く進路を考えさせる

いてどのように調べているのだろうか。同校の根崎稔美先生は次のように語る。

「この職業に就くためにはどんな学問を学んだらいいか、この学問はどの学部・学科で学べるのかなどを『FINE system』を使って調べています。そのあと、リンク機能を使って、各大学のホームページにアクセスする生徒も多いですね」

「『FINE system』の便利な機能を紹介するため、大々的にPRしました。パソコンで宣伝用ポスターを作って廊下に張ったり、クラス担任の先生方からもSHRなどで話しをするとき、生徒に勧めてもらうなど協力してもらいました。おかげで今は、放課後になるとパソコンの前に順番待ちの列ができるような状態です。『FINE system』を使うために、多くの生徒が進路指導室を訪れるようになり、その結果、進路指導室はだれもが気軽に訪れて、教師に相談を持ちかけられる場所になりました」

昨年6月にインターネットが導入されてから今年3月までの間に、進路相談で進路指導室を訪れた生徒の数は、延べ750人にもなるといふ。一昨までは、1年間に進路指導室を訪れた生徒の数が二桁だったことを考えると、大きな変化といえるだろう。生徒が進路指導室に来るようになれば、それだけ教師側から生徒に働きかける機会が増える。実際、生徒と教師が職業や大学など進路についての話をする場面が多く見られる

よつになつたといふ。

「我が校で『FINE system』を導入しているパソコンは1台。短い時間でより多くの生徒の要望にこたえるため、パソコンの操作は教師が行っています。それでも順番待ちの生徒が出てしまつので、それぞれの生徒の知りたいことを、一度にすべて調べることは、残念ながらできません。そのため、生徒は調べた結果をプリントアウトして持ち帰り、それを参考に考えを整理して、さらに調べたいことが見つかる度に進路指導室に足を運ぶことになり

ます。提供できる情報すべてを一度にはなく、そのとき必要な情報だけを与え、生徒に何度も足を運ばせる。その繰り返し、生徒に情報を吟味し、進路について考えを深める時間を与えているといえよう。

### 進路指導室で新たな発見

根崎先生は、進路に関心のなかつた生徒にも進路指導室に来てもらえるよつ、日ごろから働きかけを行っているといふ。

「全校集会などで、実際に相談に来た生徒の事例や、750人もの生徒が進路指導室を訪れたことなどを話すのも、働きかけの一つです。生徒に危機意識を持たせ、より多くの生徒が進路指導室に足を運ぶよつにむけています」



茨城県立土浦第二高校 根崎稔美

同校で進路指導を担当して今年で10年目。平成10年度より進路指導部長を務める。コンピュータやインターネットを利用して、だれもが進路指導に取り組める環境作りをめざす。

進路指導室に来る生徒は、たいてい友達を誘つてくるといふ。それをきっかけに、誘われてきた生徒が進路に関心を持ち、自分もまた訪れるようになる。そんな連鎖反応が、進路指導室の利用人数を増やしているよつだ。また、進路についてまだなにも考えていないが、とにかく進路指導室に来たといふ生徒に、根崎先生は、次のように指導しているといふ。「まず、さまざまな職業の概要を説明している資料集を渡し、その中どの職業に興味がある

### かぎは情報活用能力

根崎先生はパソコンを使った進路指導を進めるうちに、情報活用能力が身につけば、だれでも進路指導は行えると感じるよつになつたといふ。

「進路指導部の教師全員が『FINE system』を操作するよつにしたおかげで、みんながパソコンを使った情報の入手のしかたを理解できるようになりました。それに、生徒といつしよに調べるうちに、自然と進路情報の内容にも詳しくなるといふ、予想外の効果があつたんです。私も以前は、進路指導は進路に詳しいベテランの先生が行つものと考えていました。でも、情報の入手のしかたさえわかれば、進路指導はだれでも十分に行えるものと実感しています」

もつと多くの教師に、情報を活用した進路指導を行ってもらえるよつに、パソコンから情報を手でできる環境を整備していきたい、と根崎先生は語つた。